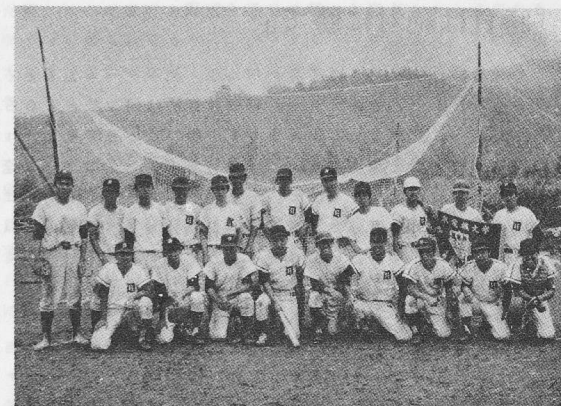


昭和44年度体育会

各部，同好会活動報告

野球部



活動報告

春季合宿 (3月22日～28日) 小金井クラブハウス

16名参加 春季リーグを目指しての実戦力養成

東京新大野球連盟

春季リーグ戦 (4月19日～5月18日 於 電大小金井G)

二部	農工大	0-⑦	電機大	
	日工大	2-⑤	"	
	理科大	5-⑥	"	
	高千穂	⑧-5	"	
	電通大	1-⑤	"	
	桜美林	10-⑪	"	
	外語大	0-⑨	"	この結果，6勝1敗で二部優勝

入替戦 (小金井G)

9月6日	都立大	2-③	電機大	
7日	"	5-⑨	"	この結果一部昇格

夏季合宿 (7月20～26日) 山梨県山中湖村 参加24名

秋季リーグ戦 (10月19日～11月7日 於 学芸大G，神宮第2球場)

一部	日本大	⑫-3	電機大	
	水産大	⑬-10	"	
	学芸大	⑫-0	"	
	商船大	2-⑤	"	
	工学院	②-1	"	この結果，1勝4敗で6位

入替戦

11月20日	都立大	5-⑨	電機大	
22日	"	0-⑨	"	この結果一部残留

「勝負は絶対に勝て」

石田栄作

野球規則の1・02に「各チームは、相手チームより多くの得点を記録して、勝つことを目的とする。」と記されている。野球の目的は勝つことである。勝つ練習、勝つ試合をしなければならぬ。野球をやる我々は、まず勝つことを考えなければならない。それには優れた技術が必要だが、学生野球においてはチーム全員の連帯感、団結、つまり、チームワークが一番大切なものだ。そのチームワークを築くには部員全員がある目標をもたなければならない。それが試合に勝つという強い意志である。全員がこの意志を持って練習、試合に臨んだときは、素晴らしい結果をもたらすものだ。人間的にも精神的にも社会的にもである。

部報記事より

「今もって忘れられない試合がある。あの極美戦である。全員一丸となって戦った。九回表同点とされたあの時、高木、田中、福田のあの気合、本当に試合をしている、戦っているんだという実感をナイン全員が味わった。もちろん、ベンチでもある。それに拍車をかけたのが福田のサヨナラ安打、全員飛び上がってベンチを出た。皆、目に涙を浮かべていた。

試合に勝つことを目的としない野球部だったら無い方がいいと思う。これは野球部にかぎらず他の全てのスポーツクラブに言えることである。

今年は上記のような結果に終わりました。念願の一部昇格を果たせたので、今年の目標はどうか達成することができました。来年は春季リーグで優勝すれば、全国大学選手権に出場できるので、部員一同張り切っております。最後に、いろいろと御声援下さいました先生方、体育会、武蔵野寮、小金井寮、その他多くの学友に対し、この紙面より心から御礼申し上げます。

「最後に」

4M 伏見章宏

まさかと思っていた。一部のチーム相手に登板しようとは思ってもみなかった。しかし本当だった。俺は登板した。もう投手は長い間していなかった。俺の球が通用するのかどうか心配であった。そしてこれが僕の現役最後の試合であった。満足であった。もうこれでいいと思った。11月2日の対学芸戦であった。

僕の電大野球部に於ける活動も今まさに終わらんとしている。打者においてより、投手に於いて生きがいを感じた僕には唯一の目標(夢)があった。1勝でいいから勝ち星をあげることであった。諸君、笑わないでくれ、僕はこの1勝に自分の全力を投入した。しかし、僕のこの夢もはかなく消えた。僕はついに1度も勝てなかったが、僕には悔はない。自分のもてる力を夢もしつくり成し得なかったのだから、しかたあるまい。むしろ満足感さえ覚えている。「世の中には勝利よりも、もっと誇るに足る敗北がある。」僕の好きな言葉ではあるが、この言葉の中にはベストをつくして敗れた男の誇りが含まれていると思う。今ではこの1勝にかけた執念がにはベストをつくして敗れた男の誇りが含まれていると思う。今ではこの1勝にかけた執念がになつかくし思い出される。僕が野球を始めたのが大学1年になった時であった。最初はどうしなつかしく思い出される。僕が野球を始めたのが大学1年になった時であった。最初はどうしようもない程へたくそであった。1年の頃の合宿は特訓、特訓に明け暮れた。食事当番のつらかったこと、しかし、数少ない1年生、先輩からよく可愛がってもらった幸せものである。又、2年の頃は希望する投手はやらせてもらえず、先輩との意見の違いもあって、よくにらみあっていたものだ。そして、3年生、たった一人の同級生の小椋がケガ、相当の痛手であった。又、心配もつきなかった。ただ、もう夢中で1年間が過ぎ去ってしまった。

これらのことも今では思い出。考えてみれば、もう4年もたってしまったのだ。この4年間に野球を通じて何をすることができたか。満足に一壘手をつとめることもできず、さりとて好

投手でも、好打者にもなれなかった僕。こんな僕にも野球を通じて得たと自信をもって云えることが唯一ある。それは、打率の向上でも勝ち数でもない。ベストオールウェイズ、常に最善をつくすと云うこの事は何よりもまして僕に自信を与えた。僕は卒業してからも他の人に、「僕は電機大野球部に於て野球をやってきた。そして、それは僕自身に非常なプラスになった」と胸をはってそういえそうである。

部員諸君よ、野球はチームプレーである。個人の記録など問題ではない。チーム全員一丸となればいかに強いかは今年の春の優勝、一部昇格で実をもって示したではないか。これまでの先輩たちの成し得なかった事をやってのけたではないか。この中に一人のスタープレーヤーでもいただろうか。否、僕はそう考える。全員の一致団結の結果だと思ふ。僕にはもう後がない。だが、諸君にはまだ来年がある。来年が今年と同じことのくり返しに成らぬよう全員総和してやってほしい。4年間も世話になった野球部、卒業後もぜひ見守り続けたい。

無

4S 小椋 悟

学生生活も残すところ数か月、今私の心には何が残っているだろう。「君は大学で何をやってきたのかね?」「はい、私は野球をとことんまでやりました。そして今、新たな情熱を持って対すべき仕事を頂きました」と。私は野球をやって良かった。何一つ後悔することはない。私は幸せでした。誰よりも根性を知りました。若さの尊さを知りました。人に感謝し信ずることを知りました。そして何よりも愛の偉大さを知ることができたのです。

これからどんな人生が待ちうけているか知りません。しかし、野球を通してこの学生生活の中に思い出した、そして自ら造りあげた真理を体を精神を愛を、私の人生軌跡の上に敷きつめたい。そしてもし私の小さな存在が皆さんの心の片隅にそっと置かれることができれば、私にとってこんな幸せなことはありません。皆さんも強く、明るく、真実に生きて下さい。苦をプラスに生かせる人こそ、真の人間を知ることができる人です。

最後に、私をここまで御指導された先輩方々、そして共にプレーしてくれた後輩諸君にお礼申し上げると共に、皆様が自己の道を力強く精進されることを期待しております。

野球部略史

昭和21年

電機学校野球部発足

同 31年

東京電機大学硬式野球部となる。

33年

春二部 8勝2敗 優勝 一部昇格

秋一部 1勝4敗 5位

34年

春〃 4勝6敗 4位

秋〃 3位

35年

春〃 6勝2敗2分 2位 全国大学選手権東都北区大会出場

秋〃 優勝

36年

春〃 7勝3敗 優勝 金国大学選手権東都北区大会出場 2回戦進出

秋〃 2勝2敗1分 4位

37年

春〃 4勝5敗1分 5位

秋〃 0勝5敗 6位 二部転落

38年

春二部 4勝5敗1分 4位

秋〃 5位